

純粹無垢なデザイナーはイケメンモデルにラブラブ調教される

1

東尾明^{ヒガシオアキラ}が西園新^{サイエンアラタ}と出会ったのはおよそ十二年前。明がまだ中学二年生の時だった。

有名なデザイナーの父親に憧れていた明は、普段から自分で服をデザインし、暇があれば部屋に籠り服を作っていた。

学校では手芸部に入部し、部活の時間も絶えず服を作り続け、それを自分で作ったネットショップで売って生地代を稼ぎ、また服を作った。

たまに、幼馴染の北尾敦キクオと遊ぶ事はあるが、その遊んでいる最中にもアイディアが浮べばスケッチブックに描いてしまうほどに、明は服のデザインを考えることが好きだった。

そんな明はあまり成績が良くなく、担任の先生からは『学力があればデザイン専門の高校に行けるのに』と言われて悔しい思いをしていた。

そんな明を見た両親は、心配して親友のモデル夫婦に頼み込み、家庭教師を付けることにした。

それが、当時高校一年生の新だった。

初対面の日も、明はいつも通り部屋で服を作っていた。その日作っていたのは、初めて依頼されたパーティードレスで、いつも以上に張り切って作っていたため、新が来ることを忘れて部屋中に生地や資料の本を散らかしっぱなしだった。

ミシンを走らせていた明は、喉が渴いたので作業を中断し、顔を上に上げる。

ずっと集中していたためか、目が霞んで見え、何回か瞬きをしてから椅子から立ち上がると頭が少しばかりクラクラする。

これまで、作業をしていてもこんな経験はなかった明は、すぐに治るだろうと思いつながら扉へ向かおうと足を踏み出した。

フラフラと歩きながら扉に近づくと、何かに躓いた。

「あっ！」

よろけて倒れそうになるが、周りに掴まれそうな物はない。

その時、部屋の扉が開き誰かが部屋へと入ってきた。

「危ない!!」

入ってきた人影に強く抱きしめられる。

薔薇のような香りが鼻をくすぐり、明は安心して胸を撫で下ろした。

「怪我はない？」

これまで聞いたことがない人の声に明は少し身構える。今日は誰か来る予定だったかと考えながら、その人影が誰かを確かめるため明は手を振り解いて距離を置いた。

「大丈夫。ありが……、えっ!？」

明は、目の前に突然現れたセンターパートの茶髪に茶色い瞳に透き通るような白い肌をした王子様風のイケメンと目が合うと、驚いて目を見開いた。

まさか、倒れそうになった瞬間に異世界にでも転生されてしまったのではないか。いやいや、そんなラノベの読みすぎでは。と首を振る明を見ながら新はクスッと笑った。

「初めまして。今日から家庭教師をさせてもらう、西園新です」

「か、家庭教師!？」

そういえば今日来るって父親が言っていたなと思い出した明は、もう一つ重大な事を思い出した。

（どうしよう。今日からこのイケメンと二人つきりになるんだ）

物心つい頃に自分はゲイだと気づいていた明は、不毛な恋を避けるためあまり同世代の男子と関わらずにいた。なのに、こんなにタイプな歳上の男性と二人つきりで長時間一緒にいるだなんて生殺しすぎる。

「よろしく」

慌てている明に気づいていないのか、新は手を差し出

して握手を求める。

細長く爪の先まで整っている指がとても綺麗で見惚れてしまう。

「よ、よろしく」

緊張気味に手を差し出すとガツチリと掴まれ、両手で手を握られる。

驚いて新の顔を見ると透き通った瞳と目が合わせられ、微笑まれる。

（こんなの恋に落ちない奴いないだろ。この人は俺に何を求めてるんだ）

明は初めて出会うタイプの人間に戸惑いを覚えながら、服のデザインと同じくらいに強い興味を示してしまっていた。

「それにしても、少し手が熱いね。顔も赤くなってるし」
「そ、そうですか？」

心配そうな顔で見つめられながら両手で手を擦られると、心臓がうるさいくらいにバクバクと鳴り響く。
もしかして、速攻で気持ちに気付かれてしまったのだろうか。

「あの、手。もう離してもらってもいいですか？」

「あつ、ごめん。癖で」

新は両手を名残惜しそうに離すと、手を後ろに持っていき組んだ。

もしかして、勘違いだったのだろうかと少し気まずくなった明は、握られていた手の温もりをもう片方の手にも移すように前で組む。

「あの、癖ってどういう事ですか？」

「ああ。海外生活が長いからなのか、スキンシップが激しくなっちゃうんだ」

「そうだったんですね。なんだ」

気持ちに気付かれていたわけではなかったのかと、明は胸を撫で下ろす。

その様子を見た新はすまなさそうに眉を下げた。

「ごめん。いきなりで驚いたよね」

「いいえ。そういうことなら平気です。それより、勉強するなら部屋片付けないと」

明は後ろを振り返ろうと一歩足を踏み出そうとする。しかし、なぜか体がふらついて上手く動いてくれない。「あっ」

また倒れそうになったところを、新に後ろから両肩を

掴まれ助けられる。

さつきより顔が至近距離に近づき、ますます顔に熱が上がつてしまう。

「やっぱり、熱があるんだよ。ちよっとおでこ貸して」
顎に人差し指を置かれ強引に新の方を向かせられると、
顔が近付いてくる。

（キッ、キスされる!?）

明は硬く目を瞑りながら、心の中で敦が言っていたフ
アーストキスはレモンの味がするというのがを思い出して
いた。

しばらくしておでこに何かが当たり、明は目を開いた。

（う、嘘!? どうしよう）

目を見開くと、目を瞑った新の顔が息がかかりそうな距離まで近づき、おでこが合わさっていた。

近くで見ても綺麗な肌と長いまつ毛に見惚れて固まってしまう。

もし、このまま目があったらどうなってしまうのだらうと、明は胸を高鳴らせた。

しかし、期待は虚しくしばらくすると、おでこが離れ、顔もどんどんと離れていってしまう。

「やっぱり熱があるみたいだな。今日は勉強はいいからゆっくり休みな」

「熱！ 朝はなんともなかったのに」

明はおでこに残った温もりを確かめるように、手でおでこを摩った。

「さっきまで、夢中になって洋服作ってたみたいだし、きつと興奮して熱がでちゃったんだよ」

「興奮って……」

確かに、初めて依頼されたパーティードレスを作るのに夢中になって、興奮していたような気がする。

「ほら、パジャマに着替えて今日はベッドで休むんだ」
もう一度、後ろからガッチリ肩を掴まれて、ベッドの方を向かせられる。

さつきより体が一段と熱くなって、これまで感じたことがないむずむずとした感覚がするのを、明は風邪のせいだと思いながらベッドに向かった。

明が恥ずかしそうにベッドサイドに腰掛けると、新は目の前で仁王立ちになりながら何か納得したように頷く。
「で、パジャマはこのタンスの中か？」

ベッドの横に置いてあるタンスの方を向いて、新は引

き出しを開けようとする。

それを、明は慌てて止めようとした。

「まって！　自分で取るから！」

いくらなんでも、出会ってから数分しか経っていない相手、しかもタイプの男子にタンスの中を見られるのは恥ずかしすぎる。

敬語を使うのを忘れるほどに焦っている明を怪しく思ったのか新は、ニヤニヤと笑いながら明の方を向いた。「もしかして、タンスの中にエロ本でも隠してるのか？」
「そ、そんな物持っていない」

「本当に？」

「本当！」

これまで、デザインの事ばかり考えていたせいなのか
全く性的な物に興味を持ってこなかった明は、エロ本は
おろかエロサイトも見ることがなかった。

あまりに強い眼差しで見つめられ、新はあっさり降参
した。

「分かった。じゃあなんでそんなに焦ってるんだ」

「そ、その」

正直に恥ずかしいと言うべきなのだろうか、けれども

普通なら男同士で恥ずかしいという感情は生まれなから、明はダンスを開けれるのだろう。

しかも、スキニップが激しい方だし、会ってすぐダンスを開けるくらい、これまで普通にしてきたのだろう。そういう結論に至った明は、誤魔化すことにした。

「実は、点数が悪かったテスト用紙をダンスに隠して」「なんだ、そんな事か」

「ごめんなさい」

嘘をついてしまった罪悪感から涙ぐんでしまう。

そんな明を見て新は目を見開きながら驚いていた。

男なのにすぐに泣いて引かれてしまったらどうかと、明がしょんぼりしていると、新が前にしゃがみ込こんだ。「いいんだよ、そんな事くらい。俺だって隠し事くらいあるし」

頬に手のひらが近づき、優しく撫でられる。

広くて暖かい手のひらに自然と涙が止まり、笑顔になつていた。

「新さんも、赤点取ったことあるの？」

「んー。それはないかな」

「えっ！　じゃあ、頭いいんだ」

「家庭教師出来るくらいにはね」

頬を触っていた手が頭に触れ、小動物を撫でるような手つきで撫でられる。

顔が熱くなってしまうているのは、きっと風邪のせいに違いない。

「ダンス。開けるよ」

「う、うん。パジャマは下から三段目に入れてあるから」
「分かった」

新は言われた通り下から三段目のダンスを開け、中を覗き込む。

すると、何故だか一点を見つめたまま固まってしまった。

「どうかしました？」

心配になった明がベッドから立ちあがろうとすると、声に反応した新が意識を取り戻した。

「いや、なんでもないよ。ところでこの可愛いパジャマとパンツはなんなんだ」

新が黒色に茶色のくま柄が入っているトランクスを両手で明に見せるように摘み上げる。

くま柄のパンツが見つかってしまった事よりも、触ら

れた事の方が恥ずかしくて明は顔を真っ赤にさせた。

「そ、それは、母さんの趣味で決して俺が選んだんじゃない」
「そんな慌てなくて大丈夫だよ。明はこのパジャマとパ
ンツ似合いそうだな。これに着替えようか」

新は持っていたトランクスを丁寧に畳むと、パジャマ
の上に乗せて一緒に明に渡す。

受け取った明はそれを膝の上に置くと、その上に手を
置いて恥ずかしそうに新の顔を見た。

「いいけど、パンツも着替えるの？」

これまで、恥ずかしいけれど母親に買って貰ったお氣

に入りの物だからと、誰にも会わない休みの日にだけ着ていたパジャマを新に似合うと言われて嬉しかった明は上機嫌になっていた。

しかし、パンツまでお揃いのクマ柄に履き替えるのはかなり恥ずかしい。

「汗で濡れてるだろうし、当たり前だろ。その前に体拭かないとな。ちよつとタオル取ってくるから待ってろ」
新は立ち上がると、部屋の扉に向かって歩いていく。
ひとつひとつの動作が滑らかで美しい新を、思わず明は目で追ってしまっていた。

「分かった。体は自分で拭くから」

何故だかむずむずしてしまっている体を触られてしまつては困ると、慌てた明は扉を開けようとドアノブに手をかけている新に声をかけた。

新はクスリと笑つてから、笑顔で明の方に振り返る。「明は安静にしてなきやダメだろ。俺が拭いてあげるから待ってな」

それだけ言い残して部屋を出て行つてしまった新に、明は何も言うことが出来ずに、固まつてしまった。

きつと、新はこれまでも看病する時にこうやって人の

体を拭いていて慣れているのだろう。

それなら、断るのは失礼じゃないのだろうか。

明は、勘づかれないように演技をしようと決心をして
新の帰りを待った。

「お待たせ。ご両親にも話してきたけど、心配してたよ。
後でおかゆ持ってくるって」

お湯を浅く入れた風呂桶とスポーツタオルを持った新